

義興はその場所を頭に納め、和紙を筒に戻そうとしたとき、裏に貼り付けてある薄手の紙に気付いた。

——何だろう。

ためらいはあったが、剥がし読んでみた。なんと真国も人の子だったのか。出立に際し、自身の出自と極秘の任務のことが、事細かに書き認めてあったのだ。

——これで、彼も安住の地が得られたぞ。

義譽は竹田の里へ向かうべく、夜道を辿り始めた。

## 右京の荒家

### (一)

永延二年（九八八）閏五月一日、掘立て小屋から出て夜空を見上げると、満点の星であった。じつと見つけていると、義譽は、身体がそのまま天空に吸い上げられて行く様な気持ちになり、足元がおぼつかないくらいであった。頬を撫でていく微風も、柔らかく、この上ない心地にしてくれた。

二年前のあの夜、木嶋社前の野道で、同じ右兵衛の真国がこの世を去った。彼は武者として最後まで責務を全うした。

ちようどあの頃、義譽は大和国から播磨国へと保輔を追って半年余り、野に伏し山に伏せ、獣を捕り、草木を食しながらの追跡行の真つ只中であったが、有馬の湯で里人から偶然耳にした話から、賊の立ち寄り先が木嶋社であることを掴み、そこへ急行した挙句が、あの悲惨な真国との邂逅で終わった。そして、真国は見事、騎龍を討ち取った。だが、一団の中に、義譽の目指す藤原保輔の姿はなかった。播磨では、里人から確かに袴垂を見た、と二カ所で耳にしていた。だが、いつの間にか一団から抜け出し、何処かへ消え去っていた。

それにしても、真国との巡り合いは、まさしく社の神の引き合わせだったのだろう。悲しい結果に終わっ

たが、真国が黄泉よみじに旅立つ間際の顔は笑みさえ浮かべている様に思えた。たとえ死の直前ではあったが、事の始めからの彼との不思議な縁に、義譽は深く、御仏に感謝した。

あの夜、義譽は手綱を引き、まだ夜も明けきららない暗がりの中で、真国が画いていた六歳の百姓家を探し出した。見知らぬ男のもたらした突然の悲報に、嫁の睦むつ、童二人、六歳と女房の常たちはどっと泣き崩れた。

「このようなご親切、誠にありがたく御礼の申し上げようもございません。仏も良いお方に拾われて、心から喜んでおりますじやろうに……。野晒のぞらしにならないで、こうして、家へ帰って……。こ、これんたんじやからなあー」

嫁の睦が二人の童を両腕にひしと抱きしめ、泣きくずれた。年寄り二人もわつと泣き出す。

義譽はいくら尋ねられても身分は明かさなかった。ただ、通りすがりの者だとだけ言った。しかし、死に際に、この御方がこの竹筒を必ずや渡して下され、と残り少ない命の中で申し伝えてこられた。だが何処へ届けるのかも分からず不心得ながら開けてみたことだけは伝えた。

この、ま・さ・く・に、と名乗った御人は、朝廷に出仕している右兵衛府うひょうえふの者であり、この家の人達には、形見として兵衛督より拝領の小刀を残す、と。そして、自分は、ある重大な任務の途中、凶らずも、この里に逃げ着いた者であり、それからの皆との生活は、決して偽りのものではなかったと……。それと、いつの日にか、童子二人を連れて妻の睦には、必ず一度でもよい、出雲国いずものくに意宇郡いおうごほりの、わたしの郡家を訪うて欲しい、と書き残されておきますと、義譽は言い伝え、紙片の入った竹筒を手渡し合掌した。

初めて知る、亡き夫、真国の出自や諸々の話に、睦は驚き、嗚咽おえつした。義譽は、悲しみに暮れる一家と泣き伏す睦を見ているうち、不意に自分自身の今の境涯きょうがいに引き戻された。

—— 郷国備前で、わが母上は、いかが過あやごされておるか……。玉野たまのは……。琴浦の亡き前妻こなりどのご一族は……。何の知らせもかなわず、みな、許して下され。

ぶるん、と一つ頭を振って、義譽は思い出をそこで断ち切った。天空には依然として降るような星があった。衛府を出立して、早や十年に垂なんなんとしており、今では、全てが何か遠い他人事の様にも思える心境になっていた。

—— いかん。これではいかん。明日、ここを発とう。

義譽は、見納めになるかも知れないここでの夜空を再び仰ぎ見、大きく伸びをした後、合掌すると、北斗の星に向かつて、今後の良き命運を祈った。

翌五月二日、糧食を馬の背に住みなれた山小屋を早立ちした。この日は好天に恵まれ、彼は田原から栗隈郷くりくまごうを抜け、順調に京へ向かった。途中、紀伊郡竹田きいごほりたけだの里に立ち寄り、真国の眠る土饅頭どまうげに花を手向けた。その夜は、老夫婦の強い引き止めもあって、義譽は一夜の宿を貰うことにした。夕餉ゆうげの後、六歳と常が言うには、睦と子ら二人は、この春以来、出雲の真国の郷里に行っていると言う。しかも、当分はその地で暮らしてみたいとの知らせもあったとの話であった。義譽は心の内で、母子の行く末に安堵した。

五月三日早朝、礼を述べ、六歳、常夫婦つねに見送られて出立した。荷馬を引き、市坊は避け、京の西郊を北に向かい、暮靄ぼあいの漂う頃、右京の端に入って来た。

ここ西五条南、菖蒲小路西の荒家に来るのは八年ぶりであった。六年前の天元五年正月、雪の中を吉田山に佳尊法師を訪ね、種々の教えを乞うた。その帰り、それより二年前に匿して、そのままになっている弓箭、胴丸を取りに行くため宇多小路の辺りまで行つて、そのあと悪辣な使庁の放免共に出遭う結果となつてしまつた。

絡まれて、やむを得ず渡り合つた末に、三人の者に射かけ、大怪我をさせ、その場を逃走し去つた。そんな理由で天井裏に油紙に包んで隠した武具は、八年の間もそのままになっており、今では使えるものかどうかも分からないが、ここに至り、あの武具がどうしても必要となる時がやつてきたのであつた。この度、義譽が胸に秘めている襲撃に際しては、どうしても胴丸と強弓が必要であつた。

真国が不運にも何者かに斃されてから二年、義譽は、袴垂保輔の動向を、ずっと窺つてきた。十年の昔、兵衛府での日々晴れ晴れと勤番に精を出していた頃には、藤原保輔のことなど、朝廷より冠を賜っている五位の兵衛尉という遙か遠い上位の存在で、彼の噂話を多少耳にしたところで、それは単なる名家の子弟の若気の至りであり、放埒な性格の悍馬のような男と、義譽自身、若さからほとんど気にも懸けていなかったが、積年を経た現在、全くそんな考えは改めざるを得なくなつていた。

六年前、神楽岡の佳尊法師から、義譽が、この特異な任務にこのまま邁進すれば、いつの日か保輔のような男との対決に収斂していくのではないかと、その示唆も受けたが、その時、それが現実になるとは本気に思えなかつた記憶がある。当時、朝廷より続けさまに発せられた保輔追捕の勅命も、上下誰もが、勅勘の者に対する朝廷の親心と思ひ、また単に、彼の悔悟の気持ちを目覚めさせる為のものとして受け取つて

いた。ともかく、誰も本気で考えてはいなかつたのだ。だが、勅命も十度目を発するに及んだ頃から、朝堂でも世間でも、ただならぬものを感じ始めていた。この頃では、朝廷も決着をつけずにはいられなくなつていた。火種は小さなうちに消すに限る。しかし猛火となつては誰にも消し様のないものだ。近年の藤原保輔がそれに似ていた。

この数年来、保輔は洛北市原野に山砦様の居館を築き、盤踞するに至つては、もはや猛火を超えた野火、山火事の類も同然で、何人にも手のつけ様がなくなつていた。使庁が各地に放つた放免の報告に依れば、保輔は他にも数カ所、出入り自由の寺社や百姓家を持つてゐるらしく、朝堂でもその動きには深い恐れを感じていた。

これではいつ都に火をかけられるか知れたものではない。だが、ただ慄いている朝堂とは別に、義譽は長い間に渡つて、この一団の動向を見張り、追つていた。しかし小一年ほど前から、その動きに奇妙なものが見られるようになっていた。初めは何でもない、野盜共の単なる気紛れのように思えたことが、近頃では、はつきりと義譽にもその変化が見分けられた。その兆しが最初に表われたのが、思えば騎龍の死んだ頃と一致する。

それまで、残虐無比であつた野盜の襲撃にはつきりとした違いが見られ、従来の凶悪さが影をひそめ、あまり人を斬らず、攫わず、火も放たなくなつていた。

——どうも解せぬ。かつて、吉田山の法師も、藤原保輔には何か得体の知れぬ危懼を抱かれておられた……。

正に、それが当たってきた昨今の動向であった。義譽はこの二年の間に、市原野へは数度足を運んでいた。いつも数十丁離れた、山砦さんざいのよく見渡せる丘の、灌木の中に罠わなを作り、長い時は十日も見張り続けた。賊は非常に用心深く、昼夜を分かつた。根城の四方一丁余りの箇所かたがはに、見張りを伏せている。そのため、義譽には未だに袴垂、保輔の風体も定かではなかった。だが、ここに至り、義譽には賊共のある一つのはつきりとした変わり様に気付いていた。その一つが武器の略奪である。従来も奪うには奪ったが、それはあくまでもつけ足しの所業で、必要以上のことはしなかった。一人で三本の弓を射ることはできず、納得のいくことであった。だがこの一年、やたらと武器を奪っている。女人にも、雑物にも目をくれず、ひたすら兵杖ひょうじょうを狙っている様子が有り有りありありと窺えた。それに他の一つは金銭であった。後に、他国で売り捌くための高価な絹物をはじめとする、財物ざいぶつなどには全く目もくれず、床板をはずし、天井に上ってまで、侵入した館で金銭を家探した。

——兵杖に金子か……。

義譽は何かに結びつくものと思つてはいたが、未だに確固たる思いには至つてなかった。それにこれまでの三度の市原野での伏せりで、遠目ではあったが、確かに保輔と思える人物、いつも狩衣かりぎぬに指貫さしぬきの偉丈夫の姿が、この年に入つてからの市原野では全く望見されなくなつていた。義譽には、騎龍の死後、藤原保輔が何かの企みを持ち、行動している姿が頭にこびりついて離れなかった。

## (二)

久々に目にする右京の荒家が懐かしい。前よりもひどく崩れた築地つじの間から馬ごと入ると、中庭には雑草がぎっしりと生い茂り、昔のままではあったが、蔓草が屋根まで這い上り、軒のくずれが各所に目立った。右京は、全体がもとは広大な湿原であつたため、庭の一部に水が湧き出ている。

義譽は、馬が人目につかないよう、隣の茅屋ぼうおくの裏手にある松の古木に繫いだ。次いで、懐かしい荒家の裏の板戸を外そうとして、はつと、その手を離れた。なんと、人の臭いが鼻をついたのだ。隙間に耳を押し当て、四半刻近くじつと内部の様子を窺つた。だが何の変化もなく、小さな物音一つ伝わつてこない。意を決した義譽は、不安な気持ちで断ち切り、家の中に踏み込んでみることにした。

板戸をそつと外し、薄暗い家の中に一歩上がった。ぶんと黴かびの臭いが漂っている。だが、それに混じつて紛れもなく人の臭いがあった。義譽は、軋きしむ板敷の上を猫足で横切ると、奥の間の杉戸に手をかけた。がらつ、と一気に引き開けた。薄暗がりの中、太刀を抱いた男が寝そべつていた。義譽が室へやへ一歩踏み込むのと、男が跳ね上がるのが同時であつた。

「しゅっ」

妙な鋭い気合を発し、鞘のまま横なぐりに足を狙つて打ちかかつてきた。辛くも躲かした義譽が、背後の板敷きに跳び下がった。男は、その一瞬の隙を見て太刀を鞘走らせると、真つ向から打ち込んできた。さまざまの刃風を耳にし、横に飛びざま、手にした小刀の峰で相手の刃を左へ払い、その手首に一撃をくれた。

「うっ」

一声唸った男が前につんのめり、手にした太刀をからりと板敷きに落とす。義譽は、あらかじめ、天井の低い家内での不測の事態に備え、拝領の小刀を抜き放って手にしていたのが幸いした。それに義譽には、何者か知れない相手を斬るつもりなど毛頭なかった。ただ、打ちかかってきたので、それに対処しただけのことであった。

「おいっ」

薄暗がりの中で一喝すると、よろめいていた男が、きつとこちらを見返したが、その顔を見た義譽は一瞬啞然となった。

「も・り・よ・り」

言いかけた時、男もその隙を見逃さなかった。身を翻すと、脱兎のごとく家の奥に走った。部屋数の多い廢屋である。床が朽ちて抜け落ちた箇所も少なくない。足元に気を取られているうち、暗くなってきた家の中で男を見失ってしまった。立ち止まって耳を澄ますが、すでに何の気配も物音もなかった。

「盛順っー」

呼んでみた。返答はなかった。すでに、この荒家から脱け出したことは明らかだった。ふっ、と息を吐き、追うのを諦めた。だがこの時、義譽の脳裏に、ある状況が突然浮かび上ってきた。今しがた逃げ去った男、忘れもしない兵衛府時代の同輩、盛順に瓜二つの男、あの男の逃げる後ろ姿には確かな憶えがあった。義譽は背筋に悪寒を覚えた。二年前、木嶋社で真国を斬り、夜闇の中を逃げていく、奇妙な頭巾の影は、こ

の夜、決定的に盛順と断定するに至った。

——今の男が盛順なら、なぜ、あの夜同輩の真国を斬ったのか……。

義譽は、驚きと共に、なぜか釈然としない苛立たしさを覚えたが、ともかく明かりをともすことにした。先ほどの室に戻り、頭陀袋から火打ち袋を出し、中から火打ち石と脂燭しそくを取り出した。

やがて辺りに薄明かりがさし、義譽はまず自分の周囲に目をやった。室の隅に何かある。先ほど奴が寝そべっていた所だ。近づいて見ると木箱であった。三つある。不審に思い蓋に手をやると、すーっと開いた。一瞬、義譽は驚いた。銭がぎっしり詰まっている。一尺四方の木箱に、どれも一杯詰まっていた。灯りを手に持ち、かざして見ると、全て銅銭であることが分かった。乾元大宝かんげんたいほう、延喜通宝えんぎつうほうが主で、他にも何種か、あまり目にしたことのない銅銭もあった。木箱の横に何か置いてある。義譽は、手に取り、灯りに照らしてみて唸った。

——袴垂保輔。

短冊たんざく様の紙片数十枚に、そう書かれてあったからだ。

——これは……。

字は極めて達者なものであった。義譽の脳裏を一時に色々な事が駆け巡った。袴垂の奇名は、兵衛府で勤番の頃、耳にしたような気もしたが、何にしる、初めての勤番と激しい校練こうれん（訓練）、それに都の美しい佇まいと街行く女性にょしょうの姿、それに自身の若さも手伝ってか、そんな奇妙な、人の呼び名など意にも介さず、その場で忘れてしまっていた。だが、その後数年の勤めと、大任を受けての兵衛府からの出立、又その後